

# 大学と住民の連携による地域保健活動への取り組み（実践報告）

柴田 滋子, 藤井 広美, 川名 ヤヨ子, 佐藤 みつ子

了徳寺大学・健康科学部看護学科

## 要旨

高齢化やコミュニティの希薄化が進む中、大学として地域に貢献できないかと模索する中で、有志学生からなる地域保健活動グループRUNPを結成した。高齢化が進行するA市Bマンションとの協働により活動を定期的に行い、約2年が経過した。この活動を通して学生は世代を越えた交流を体験し、地域住民への理解を深めるとともに自らの気づきへとつながり成長がみられている。今後も継続することで学生の気づきの促進と地域との協働からコミュニティの活性化に貢献したいと考える。

キーワード：地域連携, 地域住民, 看護学生

## Community Health Activities Through Cooperation of a University and The Local Community (Practical Report)

Shigeko Shibata, Hiromi Fujii, Yayoko Kawana, Mitsuko Sato

Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University

## Abstract

The residents of the apartment B in the city A are aging rapidly. Trying to find out what contribution we can make to the local community, we organized a community health activity group of volunteer students named RUNP (Ryotokuji-Urayasu, Nurse, Project). RUNP has periodically collaborated with the residents over period of two years and through the cross-generational exchanges, the students better understood the local inhabitants, also providing opportunities for student self-reflection. We want to continue the collaboration and contribute to the area, and give students opportunities for self-reflection as a result of such interaction.

Keywords : community connection, local inhabitants, nursing students

## I. はじめに

わが国は世界で最も長寿であると同時に高齢化が進み、総人口に占める老年人口の割合は平成22年23.0%から平成32年には29.1%、平成42年には31.6%と急速に進行することが予測されている<sup>1)</sup>。長寿社会となった現代では、単に寿命が長いことよりも生活の質、生命の質に重点がおかれるようになり、健康面においても早期発見・早期治療の二次予防から健康の維持増進の一次予防の大切さが広がり、各地で様々な取り組みがされている。当大学のあるA市も例外ではない。そのような中、看護学科では地域の1つの資源として貢献できることはないかと考えた。大学と地域住民がそれぞれの力を生かし協力・協働することは双方にとってメリットがあり、またコミュニティの強化、地域の活性化にもつながるのではないかと考えた。今回は平成23年度からA市Bマンションと行っている協働事業について報告する。

## II. A市Bマンションの概要と「あんしんマンションライフ事業」

A市は旧町のころから長い歴史のある地区、高度経済成長期（転換期）に埋め立てにより造成された地区、昭和50年以降に埋め立て造成された地区の3つの地区からなる。このうち埋め立てによって作られた二つの地区には多くの高層集合住宅がある。

A市の高齢化率は13.0%（平成24年4月1日現在）と全国でも最も高齢化率が低い自治体の一つであるが、地区によって差がある。Bマンションは、高度経済成長期（転換期）に建設された比較的高齢化率の高い地区であり、約800

世帯が居住している。当時の入居者は30歳代から40歳の働き盛り世代家族が中心であったが現在は住民の27.7%が高齢者となっている。図1はBマンションにおける平成17年および平成25年4月1日現在の年齢区分別人口構成を示したものである。平成17年は当時の全国平均高齢化率20.2%を大幅に下回っていたが、この8年間に2倍を超える勢いで増加し、平成25年には全国平均（平成24年度国勢調査）24.1%を上回った。人口減少時代に突入し、さらに高齢化が加速していくことが予測される。また、働き盛り世代人口の減少に伴い、自治会やBマンション管理組合など地域を支える地縁組織の高齢化も進んでおり、住民同士の支えあいの基盤が脆弱化することが懸念されている。

このような状況を背景に、Bマンション管理組合では、高齢になっても安心して暮らせる地域づくりをねらい、平成23年1月より、A市の「一人暮らしの高齢者の見守り安否確認事業」の

モデル事業として「高齢者あんしんマンションライフ事業」補助金を得て、Bマンション管理組合と自治会の共同事業として「あんしんマンションライフ事業（以下AML）」を実施している。AMLは、Bマンション管理組合と自治会の共同による実行委員会を事務局として、社会福祉協議会推進委員や民生・児童委員をはじめとした地域住民の主体的な取り組みを核として、保健・福祉などの行政組織、R大学看護学部などの地域の社会資源との協働により〔表3〕のような活動を展開している。

高齢者にとっては「長年暮らしたこの町で年を重ねても安心して暮らせる」地域づくりを、若い世代に対しては「（離れていても）帰りたい」と思える場づくりを目指し、年間を通して様々な行事が行われている。

## III. 当大学看護学科の取り組み

### 1. 協定の経緯

当大学では平成23年4月に看護学科が開設した。大学のあるA市に対して大学は地域の1つの資源として、看護の専門性を活かした地域との連携を考え、Bマンションの住民組織AML実行委員と定期的に会合を行い、関わり方についての検討を行った。その結果地域における住民、自治体、大学との連

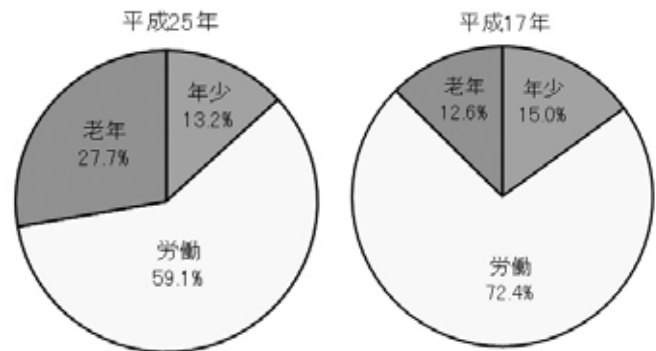


図1. Bマンションにおける年齢区分別人口割合の変化

表1. AMLの主な活動

- ① サロン活動（毎週開催）：健康増進のための講座や運動の実践。マンション住民の交流。
- ② 安否確認：電話による直接安否確認、集合ポストの郵便物等のチェック
- ③ 健康・介護相談（月2回）：市地域包括支援センター看護師・保健師による健康相談
- ④ R大学連携事業：看護学科の教員・学生との協働による講演会・サロン活動の実施

携を推進しそれぞれの強みを活かすこと、また住民の①自らの健康について考えるきっかけ作りとなること②周囲との相互作用により、自己効力感を高めるとともにコミュニティの強化を図ることを目的に平成24年度からはBマンション管理組合と協定書を交わし、定期的に（2ヵ月に1回）サロンへ参加している。

## 2. 地域保健活動RUNPの結成

看護学科は平成23年度に新設されたため1期生は先輩がいない、サークルが少ない状況にあった。そこで地域看護学領域では地域との交流と学生間交流を目的とし、有志を募り地域保健活動グループを結成した。了徳寺 (Ryotokuji) の「R」、浦安 (Urayasu)・大学 (University) の「U」、看護 (Nurse) の「N」、プログラム (Program)・プロジェクト (Project) の「P」の頭文字をとりこの活動グループを「RUNP」と名付けた。学生の自主的参加による地域保健活動を通して、地域住民（多様な年齢、価値観を持つ人）との交流の機会、事業に参加する準備等による考える力とチームで協力する力、また学年を超えた学生間交流の場とし、体験を通しての学びを促進したいと考えた。

## IV. 活動の概要

当大学とA市Bマンションとの協働活動は、前年度に協議・決定した計画に沿って実施されている（表3）。他学科教員の協力も得ながら、生活に添った、バラエティに富んだテーマを取りあげ行っている。学生は授業があり参加できないこともあるが、平成24年度は延べ98名、平成25年度前期は延べ79名が参加し、地域住民を対象とした活動を行っている。

下記活動以外にもサロン活動への参加者に合った手軽にできる体操のDVDを作成した。他学科の協力も得ながら内容を検討し、音楽による癒しに重点をおき、演奏、実演、ナレーションを学生が担当した。また地域保健活動RUNPの活動をまとめて、リーフレットを作成した。

## V. 活動評価と今後の展望

### 1. 学生の気づき

「RUNP」の規約に沿った地域保健活動に参加した学生の気づきや心の動きから、看護学生としての

＜市民・市・大学連携による地域活動の概念図＞

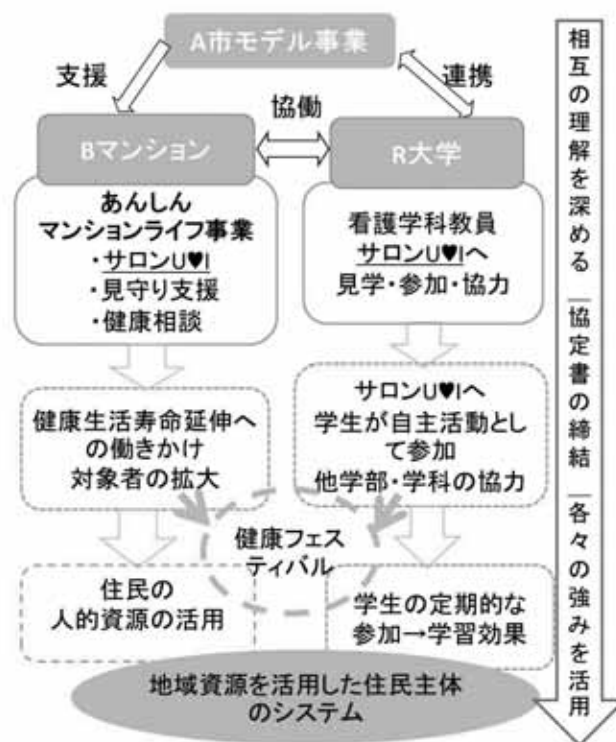


図2. 市民・市・大学連携における地域活動の概念図

表2. RUNPの規約と特徴

### RUNPの規約と特徴

- ① 地域保健活動に興味を持っていること
- ② 空き時間を使って事前準備や学習に参加できること
- ③ 公衆衛生実習室を使って活動の準備を行う
- ④ 活動が終了した後にはまとめのポスターを作成する（図3）
- ⑤ 各種事業への参加は個人の自由意思による
- ⑥ リーダー1人、副リーダー2人とし、行事ごとに各責任者は交替する



図3. 学生が活動後に作成したポスター

表3. Bマンションと当大学の現在までの経過

	サロンU♥Iへの参加	当大学の参加者と内容
H23年 11月	血流観察 住民40名参加	看護学科教員 血流についての講義と個別に血流観察の実施
H24年 2月	血流観察② 住民35名、市職員2名参加	看護学科学学生14名、看護学科・他学科教員3名 血管についての講義と個別に血流観察を実施
4月	心と体のバランスについて 住民38名参加	看護・理学療法・整復医療トレーナー学科教員 *サロンで行える体操の考案(看護の視点で)
6月	心と体のバランスpart2 住民38名、市職員2名参加	看護・理学療法学科教員 U・I体操DVDを作成し紹介
8月	睡眠について 住民39名参加	学生19名、看護学科教員 講義後、グループ対抗クイズを実施
10月	頭の体操・口腔リハビリ 住民40名参加	学生1名、看護・整復医療トレーナー学科教員 講義後、顔・頸部マッサージ方法を紹介・実施
10月	体にやさしい歩き方 住民36名参加	看護・整復医療トレーナー学科教員 講義後、歩き方(姿勢)を実施
12月	クリスマス・リース作り 住民37名参加	学生19名、看護学科・芸術学部教員 リース作りとクリスマス演奏を実施
H25年 2月	免疫力アップ 住民36名参加	看護学科教員 講義後、呼吸法、ストレッチを実施
6月	維持していますか？	学生19名、看護学科教員 講義後、「看護」「当大学の芸術科目」「ナース服」について発表
10月	生活の中での転倒予防	看護・整復医療トレーナー学科教員 講演、バランス運動を実施

<Bマンションの全住民を対象とした行事>

H24年 8月	夏祭り	学生18名、看護学科教員 「健康ゲーム(バランスチェック・輪投げ)」出店
10月	健康フェスタ 住民50名、社協職員1名参加	学生25名、看護学科教員 肺年齢、血流観察、バランスチェックを実施
H25年 4月	健康フェスタ 住民72名参加	学生41名、看護学科教員 血流観察、血管年齢、U・I体操を実施
8月	夏祭り	学生19名、看護学科教員 「健康ゲーム(バランスチェック・魚釣り)」出店

<A市の一地区を対象とした行事>

H25年 2月	健康フェスタ(社会福祉協議会) 住民128名参加	学生28名、看護学科教員 血流観察、肺年齢、バランスチェック、U・I体操を実施
------------	-----------------------------	--



自覚と看護に向けた意欲がくみ取れる。以下に活動を始めて6か月経過してBマンションの全住民を対象に行った健康フェスタに参加した学生の参加動機・目的・感じたことを[表4]に示す。

表4. 平成24年10月健康フェスタ参加学生の参加動機・目的・感じたこと

学生	参加動機	参加目的	感じたこと
A君	夏祭りに参加した経験から地域の方々に今度は自分に出来ることをしたい。	・ハイチェッカーのリーダーとしてメンバーと協力して責任を果たしたい。	初めてお会いする高齢者にどのように話したらよいか悩んだ。どんな場面でも礼儀が大切だと思い、心がけた結果話かけてくれるようになった。
Bさん	今まで機会がなかったが、自分に出来ることをしたい。	・初めての人に対して積極的になれないのでそれを克服したい。 ・自分に足りない部分を見つけない。	・自然と視線を同じにして話せた。改めて人に伝えるのは難しいと感じた。 ・知識とコミュニケーション力が足りないが、知識は今後の学修で身に付けたい、自分で思っていたより人見知りではなかったので積極性を持ちたい。
Cさん	地域の方々に触れ合う機会がなかったので参加したいと思った。	・いろいろな年代の人々との交流を通して、自分がどう接することができるか経験したい。	様々な世代の方と触れ合うことができ、意外と自分から話しかけられた。私の話をきちんと聞き入れてくれた。参加者に計測方法や結果の説明に悩んだことが良い経験になった。
Dさん	病気を患った人の看護だけでなく、予防の段階の看護に触れたい。 座学で学べないことを学びたい。	・積極的に話かけて、今住んでいる市民の様子や特性に気づきたい。	積極的に「どうですか」と話しかけるようにした。「このような機会はないので良かった」と聞いて、自分の体のことを知る機会が少ないと分かった。 数回お会いしている人からは孫のように接してくれた。
E君	多くの方と触れ合い地域活動の重要性を身近に感じたい。	・健康に対する考え方を多くの方から学びたい演奏や合唱が心に与える影響を感じ取りたい。	健康チェックには根拠と知識が求められる、学習意欲が出た。 演奏と合唱は住民とが一緒になり、大きな一体感が生まれた

また9か月経過した学生からは『最初バラバラだった僕たちが集まってここまでやれたのも、地域の方々・教員・仲間存在でした。僕は、看護師を目指す者としてRUNPの活動を通して学んだことを伝えたい。他の学生たちも考えてほしいと思っています。僕たちはこの活動では、“何かすること”から始めましたがそれではいけないと思います。僕は何かをさせて頂くことに感謝し皆さんが健康に生活できるよう、学生みんなで知恵を出し合い協力して「ありがとう」の気持ちを伝えていくべきではないかと思っています』との声が聞かれた。学生は授業で学んだことを振り返りながら、いかに分かり易く住民の方々に伝えるかを考え実践してきた。この体験を通して日頃の講義では見えない学生の潜在能力が引き出され、変化がみられた。学生の成長には住民の方々の温かい見守りによってのびのびと活動できたことも大きな要因の1つであったと考える。

## 2 住民の声

住民からは「若い人と話ができ元気になった、昔を思い出した」「今後も学生と交流できる機会を設けて欲しい」「学生は若さと優しさが溢れていて素晴らしかった、学生諸君を応援する」「合唱や演奏を聞いて学内の雰囲気の楽しさが伝わってきた」などの意見が聞かれ、サロン活動においては、学生の参加を楽しみにしてくれている方もみられている。

### 3. まとめ

地域住民との協働による活動を通して、地域の特性や住民の特徴を知ることができた。また当大学を地域の方に知ってもらう良い機会であったとも考える。地域住民の思いやりに触れながら学生は色々なことを感じ、学内では学べない多くの体験を通して自らを振り返り、学生個々の成長にもつながったと考える。

地域保健活動としては定期的なサロン活動への参加から始まり、Bマンションの全住民を対象とした活動、A市の社会福祉協議会が主催する活動にも参加することができ、対象者の拡大にもつながっていくことができた。今後も継続しながら、住民との協働によるコミュニティの強化を図るとともに、学生の体験・学びの場として活用したいと考える。

また来年看護学科は4学年揃うことになる。RUNPの立ち上げ時は1期生と教員が作り上げてきたが、今後は学生の中で体制作りを整え、より自主的なまた学生の個性を生かした活動につながっていくことを期待したい。



図4. 学生とサロン参加者との交流

### 文献

- 1) 厚生統計協会編（2013）国民衛生の動向・厚生の指標 増刊. 厚生労働統計協会60（9），46.
- 2) 羽柴淳，川木詠美，上原周悟ほか（2011）学生企画のフィールドワーク型地域実習に関する報告. 琉球医学会誌. 30，61-67.
- 3) 吉川洋子，松本亥智江，松岡文子ほか（2010）地域住民との交流をとおして身につけるコミュニケーション能力. 看護展望. 35（4），16-23.

（平成25年11月29日稿）

査読終了年月日 平成25年12月27日